ルネサンスの王権と祝祭本
―ハプスブルク家とメディチ家をめぐって

上尾　信也

1　ルネサンスの戦争と平和

中世から近代に向かうヨーロッパは群雄割拠の戦国時代にあった。16世紀は、プロテスタントのカトリックの宗教的な対立項を軸に分かれた新興勢力と旧勢力の両陣営が、軍事的な緊張とその破綻を繰り返しつつ、絶対王政の中央集権国家への道を歩み始めた時代であった。新興勢力は、それまでの中世ヨーロッパ世界の周縁部にあった、ザクセン、ブランデンブルク(後のプロイセン)を始めとするドイツ諸侯、デンマーク、スウェーデン、そして薔薇戦争により完全にフランス王権から独立したイングランドであった。一方、旧勢力は、中世ヨーロッパ世界の中心いやそのものと呼べるべき陣営であり、教皇とイタリア諸都市、スペインとオーストリアの両ハプスブルク家、フランス王家で、16世紀にはその多くはカトリックを護持し続けた。フランス、そしてインググランド(イギリス)は新旧両陣営の間でゆれつつも着実に絶対王政への要件をみたしていく。そしてそれは。中央集権的な官僚制度と強力な常備軍の設置に近代国民国家の成立の一因を求めた「長き軍事革命」の成果でもあった。これに対し、旧陣営の雄ハプスブルクの帝国は腐食し浸食され解体していく。

軍事革命は、15世紀から始まった。百年戦争のアジャンクールの戦いでのフランスの重装騎士に勝ったイングランドの弓兵、シャルル突進公対スイス傭兵、マクシミリアン皇帝のランツクネヒト(ドイツ傭兵)といった騎士を中心とした戦士ではなく、軍事専門家の兵士の出現、それにともなう騎士軍から騎兵・歩兵・弓兵そして砲兵の諸兵科統合の軍隊の誕生であった。これには東ローマ帝国を滅ぼしバルカン半島に侵入、ウィーンに迫ったオスマン・トルコの軍隊の強力さと恐怖が大きく関わっている。オスマンの常備軍団(カプクル・オジャワ)の、専門の砲兵(トプジュ)の放つ大砲の轟音、常備歩兵(イェニチェリ)の火縄銃の集中的な銃撃、その後の常備騎兵の六連隊衆(アルトゥ・ボリュク・ハルク)と刀槍弓矢で武装した在地騎兵軍(ティマールル・シバーヒ)の大軍団の突撃の前に、十分な火砲もないヨーロッパの諸侯の騎兵歩兵弓兵混成軍は壊滅的な打撃を喫したのである。そのオスマンの大軍団の統率と鼓舞を担っていたのが、ショームに似た二

枚リードのズルナ、金管のボル、鍋型太鼓ナッカレ、両面太鼓のダウル、ティンパニ型の太鼓ケスからなる軍楽隊であった。統率と示威の二面に音楽は仕えることで軍事革命の一翼を担い、ヨーロッパの王侯はオスマン風の軍楽を取り入れて自らも軍楽隊を創設した。軍楽に限らず軍事と音楽は、古来より不可分のものであり、音楽は、軍事的な効果だけでなく政治的威信を表現する格好の武器であった。この殺戮にいざなう戦場の音は、一方で戦場を離れた軍事の示威の演出ための音楽という新たな道を生み出す。そのルネサンス的表現のひとつが「入城式」であった。軍隊を伴った王侯が自らの支配する都市を訪問する入城式は、美術による装飾、音楽や演劇の上演といったさまざまな道具立てにより王権の威容を演出する。戦場へではなく、都市へと向かうこの行列こそが、平和につながる音楽のもうひとつの道だったであろうか。

2　王権と祝祭

ルネサンスには、軍事的象徴の場としての祝祭の機会は数多く現われた。戴冠式、王家の婚礼、王嗣子の洗礼、臣従の誓い、都市への入城式、和平条約の締結や国葬などの際に、「王」という曖昧な国家の中心点を、具体的な姿としてあたかも公開の劇場で披露するかのように祝祭は催された。祝祭の表象や隠喩に満ちたプログラムとパフォーマンスは、王を「ローマ皇帝」のイメージに帰すべくギリシア・ローマの神話や芸術を利用してルネサンスの文人たちによって練り上げられたものであった。凱旋門を造り山車を伴うページェント(凱旋行列)、トーナメント(武芸試合)などの多彩な競技会、寓意と象徴に満ち室内外の舞台で演じられる劇、それらに関わるシナリオ、コスチューム、宴会、音楽といった、2,3 日から時には 1 ヶ月に及ぶ祝祭の統括にあたる監督者の指揮の下、ありとあらゆる芸術分野の共同作業の集成が、このトータルなスペクタクルに集約された。いわば、ルネサンスの芸術家たちの真の仕事はここにあった。王権のイメージを創出し、権力の保持に寄与することが、知識人、年代記作者、画家、音楽家、演出家、建築家やあらゆる種類の職人といった宮廷

に仕える者に与えられた使命であった。

なかでも入城式（エントリー、アントレ、入市式、総行列）は、戦勝の祝いあるいは祈願の意味を持つ凱旋行列が軍事的行為の意味を代表するものとして、軍事教練の意味合いをもつ武芸試合（トーナメント）と並んで、王権の最も具体的な表現となった。傭兵から国家軍隊へと向かう王の軍を用い、知識人から官僚となりつつある宮廷人が、暴力と野蛮を統治と理性に昇華すべく、武力による支配から「権力の表現」による威力支配を表現しようとする装置であった。城壁の外から内へ向かい都市の中心部の宮殿や聖堂での儀礼にいたる入城式のベクトルは、プロセッション、ミサという宗教的機能を包含していた。王を称え、武力で威圧することで、「血の流れぬ」という意味での平和的支配の象徴として機能していた。

これらの祝祭は王の永遠の栄光の記録として、王の支配の証として、記録されねばならなかった。そのために支配者は、祝祭の実施とは別に、これらの重要な祝典の華麗さとスペクタクルを記録する為の豪華な書籍制作を注文した。企画全体の責任者である宮廷詩人や画家は、再度これらの祝典後の出版のために呼び集められた。莫大な費用をかけられ限定出版されたこれら「祝祭本」は、王侯の力と富と権威の証明であると同時に宮廷のプロパガンダでもあった。

祝祭本のいくつかには、「そして音楽が演奏された」あるいは「声楽と器楽による美しい演奏があった」などの短い記述が、音楽の図像もなく引用されている。しかし一方で時には楽器自体の精緻な描写も、参加した音楽家についての極めて詳細なテキストや図像も誂えられている。もちろん祝祭本は我々に同時代の演奏実践や宮廷においての音楽の役割についての重要な情報を与えてくれる。がそれ以上に、祝祭図像の中に描かれた音楽には、現実の祝祭の演出であった奏楽を単に描き込んだ以上の意味があるように思われる。それは、中世以来の写本挿図（ミニアチュール）に丹念に想像上のあるいは理念上の楽器や奏楽の様子を描くことで示してきた「音楽」の価値に通じるものである。つまり、「音楽は財宝にして権威」の象徴である。聖書の奏楽は「神威」を管楽器は

軍楽そして武力に通じる「王威」を描かせる者の頭上に戴かせることになる。聖書の関連図像からやがて世俗の祝祭図像に変化していく時代、まさにそれはキリスト教の一元的価値観の中にあった世俗の王権が、王の理想像をダビデからカエサルへと姿を変えて描かせたように、新たな権威そのものとして屹立しようとした証なのである。

そして描かれる素材も変質する。トーナメントは神に仕える騎士の武勲物語の現実の絵巻ではなく、王権の祝祭の一部として催され、戴冠式や入城式、巡幸は、中世の実質的な支配の手段としての政治儀礼から、象徴的儀礼として王権の祝祭の一部となり、記録されていく。ルネサンス(文芸復興)は、キリスト教的道具立てから神話的道具立てへの原動力となる。演劇、舞台、音楽、プロセッションといった催しの内容は、パフォーマンス以上に、詩、詩人による台本制作、画家や建築家による視覚的表現といった文芸的要素が重視され、書き残されるものとしての祝祭本の意義が増していくのである。「何を催す」のではなく、「どのように催したことにするか」、そして「どのように広めるか」なのであった。

3 ルネサンスの光と影

(a) ハプスブルク皇帝家の祝祭本 ―戴冠式と巡幸

祝祭本の表題はまさに一枚刷りのビラのごとく、祝祭の内容のみならず主催者の威名を知らしめる。この時代現れた印刷楽譜が、表題に献呈する王侯貴族への美辞麗句をちりばめ権威による認証を行ったのも、祝祭本のみならずこの時代に盛んになる印刷本というメディアの重要な要素であった。権威により認可されることでメディア(伝達媒体)は可能になる。逆に言えば、絶対王政において、メディアはあらゆる場合に王権のプロパガンダとなりえた。作品や作者が仕えるのが神から王に代わっただけにすぎないかもしれないが、地理的な世界と同様、森羅万象の知と情報は王のものという宣言でもあった。

空間の支配者は、いかに時間をこえて威光を伝えていこうとしたのであろうか。いくつかの祝祭本の刊行をみていくことで、祝祭をつうじた威光によって祈念されるルネサンスの理想と、

【図 1】1515 年 4 月 18 日 カールのフランドル伯 としてのブリュージュ市への入 城 式（Bild-Archiv und Porträt-Sammlung, Österreichische Nationalbibliothek, Wien）

16 世 紀 の 戦 国 の 現 実 を 考 え ていきたい。

1500 年 にフランドルに生 まれた皇 帝 カール 5 世 のデビューというべき入 城 式 の 祝 祭 本 が 残 されている。 1515 年 4 月 18 日 のフランドル伯 としてのブリュージュ市 への入 城 式 である。祝 祭 本 の 表 題 には「スペイン王 子 、オーストリア大 公 、ブルゴ

ーニュ公、フランドル伯」とあり、入城式ではそれぞれの肩書きを示す紋章や諸国を示す意匠が用いられた。(【Appendix Ⅰ-1】【図 1】)

カール 5 世はフェリペ 1 世(1478 年-1506 年・フィリップ美公)とカスティーリャのフアナ女王(1479 年-1555 年)の間に生まれた。母方の祖父母は結婚によって統一スペイン王国を誕生させたアラゴン国王フェルディナンド 2 世とカスティーリャ女王イサベルであった。さらに父方の祖父母は皇帝マクシミリアン 1 世とブルゴーニュ公女マリアという血筋であった。1506 年に父からオーストリア大公、ルクセンブルク公、ブルゴーニュ公、母からは後にカスティーリャおよびレオン王位を受け継ぎ、1516 年の祖父フェルディナンド 2 世の死後、アラゴン王、バルセロナ伯、バレンシア王、ナポリ王、シチリア王、すなわちスペイン王カルロス 1 世として即位する。正式な継承権は母ファナにあったが精神病として幽閉されていた。 ブルゴーニュ-フランドルの統治を叔母マルガリーテに任せ、1517 年にスペインに入る。カールの統治領内の巡幸に費やした生涯はここから始まる。スペイン貴族らの反乱に対応する間も無く、 1519 年に祖父の皇帝マクシミリアン 1 世が死去し、15 世紀末よりイタリア戦争で対立していたフランス王家のフランソワ 1 世と皇帝選挙で争った末に、フッガー家の資金援助などによって神聖ローマ皇帝カール 5 世として即位する。即位式はアーヘンで執り行われるが当時メディチ家出身の教皇レオ 10 世(在位 1513-1521)と対立しており、教皇による戴冠式は果たせなかった。 レオ 10 世は 1521 年死去するが、2 年後、従兄弟の枢機卿ジュリオ・ディ・メディチが教皇クレメンス 7 世(在位 1523-1534)として即位する。1521 年はウォルムスの帝国議会にルターを喚問し、ルター派の禁止を決定した年でカールにとっては内憂外患の戦乱の始まりであった。

イタリアをめぐる外患にこそ祝祭は利用される。始まりは、王家の継承であった。1435 年以降、ナポリ王国を支配していたフランス系のアンジュー家とアラゴン家が争い、1443 年、ナポリはアラゴン家の支配下に入った。1494 年、フランスはナポリとミラノの継承を主張し、シャルル 8 世はイタリアに侵攻した。(【図 2】)シャルルはフィレンツェからメディチ家を追放し、

【図 2】フランチェスコ・グラナッチ〈フランス王シャルル 8 世のフィレンツェへの入城〉(1518 年)GRANACCI, Francesco(1477, Firenze-1543, Firenze),*Galleria degli Uffizi, Florence*

翌年ナポリを占領するが、教皇アレクサンドル 6 世、皇帝マクシミリアン 1 世、スペイン、ヴェネツィア、ミラノが神聖同盟を結び対抗したため、撤退する。1499 年にはルイ 12 世がミラノの継承を主張し、スフォルツァ家のミラノ公ルドヴィコ・イル・モーロを幽閉、ミラノ公国を征服する。しかし 1503 年には スペインがナポリを征服し、翌年ブロア条約によりフランスがナポリを放棄。さらには 1511 年に教皇ユリウス 2 世が、スペイン、ヴェネツィア、イギリス、スイスと神聖同盟を結び、フランスに対抗すると、1513 年にはミラノからフランス軍が追放され、スフォルツァ家が一時復帰するが、1515 年にはフランス王フランソワ 1 世がミラノに侵攻、9 月 13,14 日のマリニャーノの戦いでミラノとスイス傭兵軍を破り、スフォルツァ家を追放し、ミラノを支配する。クレマン・ジャヌカンは戦勝を記念してシャンソン《戦争》を作曲し、この後さまざまな宮廷で愛好された戦争描写の音楽「バッターリア」のモデルとなった。これに対し 1521 年に

はフランソワのライバルで皇帝選挙に勝利したカール 5 世は教皇レオ 10 世と和解しミラノを攻め、ビコッカの戦いで勝利し、フランスを放逐した。しかし次代の教皇クレメンス 7 世は当時の複雑な政治状況の中、フランスと同盟を結ぶ。フランソワは 1524 年イタリアに侵入するも 2 月 24 日のパヴィアの戦いで皇帝軍に敗れ、捕虜となり、マドリッドに幽閉の憂き目をみる。1526 年フランソワ 1 世にナポリとミラノを放棄させたマドリッドの和約を結び完全に勝利したカールは、この年ポルトガル王女イザベラと結婚し、これを記念してセヴィリヤで入城式を行っている。だが、釈放されたフランソワはただちに条約を破棄、教皇、ミラノ、ヴェネツィア、イギリスと反ハプスブルクのコニャック同盟を結んだ。この報復が 1527 年のローマ略奪である。皇帝の意に反してスペイン兵、イタリア兵などからなる皇帝軍とドイツ傭兵は長期の行軍に給料未払い、飢餓もあり、悪名高き略奪が発生する。

1529 年、教皇と皇帝はバルセロナ条約を結んで和解し、8 月には「カンブレーの和」でフランスは賠償金を支払い、イタリアを放棄し、11 月には皇帝は戴冠式のために教皇を伴いボローニャに入城する。この折にイタリア諸国が集まり、皇帝カールに服することを決め、イタリアにおけるハプスブルク家の優位が確定する。フランス王フランソワは皇帝カールに対抗するため、カトリック教徒であるにもかかわらず、ドイツのルター派プロテスタント諸侯を支援し、第一次ウィーン包囲（9-10 月）下にあった異教徒のオスマン帝国皇帝スレイマン 1 世(在位 1520-1566)ともひそかに同盟を結ぶ。

このような中で 1530 年 2 月、ボローニャにおいて教皇クレメンス 7 世によってカール 5 世に対して神聖ローマ帝国皇帝の戴冠式が行われたのである。ローマは略奪から未だ復興できずそのためボローニャで催されたカールの神聖ローマ皇帝への戴冠式は、1529 年 10 月 24 日から 1530 年 3 月 22 日にかけての一連の祝祭儀礼であった。「現世の神」としての役割を演じたカールの入城式は、古代ローマのカエサルの後継者としての皇帝を示威するものであり、皇帝の権威は当時では教会とその典礼による忠誠の擁護と異端の排除という権能に救けられて確立していたことをも示すものであった。

1529年10月24日の教皇クレメンス7世のボローニャへの入城式では、教皇はマジョーレ門を通って讃歌〈テ・デウム〉を捧げるサン・ペトローニオ大聖堂まで行列（プロセッション）を行なった。その12日後11月5日に、カールは完全武装の軍を従えサン・フェリーチェ門を通りボローニャに入城した。皇帝は400の教皇護衛兵を従えた20人の枢機卿と合流した。300の騎兵がプロセッションを先導し、それにスペインの貴紳の一団と武装した300の帝国直属騎士が続いた。戦車に積まれた10門の大砲が通りいっぱいに押し出し、ドイツの傭兵隊（ラントクネヒト）が鼓笛隊を伴いその背後に続いた。山車に乗った2人の貴族が帝国とブルゴーニュ公国の旗印を掲げた。その後にはいくつかの軍団が続く。そしてスペインの高官の一団は矛槍を持った100人の皇帝の親衛隊に守られて続いた。そして、帝国式部官が、金の鷲の飾りの兜などで完全武装した皇帝を先導した。徒歩の4人の帝国直属騎士がカールの頭上の天幕を支えていた。市門で、皇帝は彼に献呈された十字架に接吻し、帝国紋章官が群衆に8000枚のデュカート金貨や銀貨を投げ与えた。そして、いくつかの凱旋門を通って教会に進んでいった。これらすべては聖俗両界に威厳を示す皇帝としての予定通りの行動であった。明らかに、これらは教皇庁によって予め仕組まれており、教皇クレメンス7世はサン・ペトローニオ大聖堂にて皇帝を待ち受けていた。翌1530年2月24日には、帝冠を伴った荘厳かつ祝祭的な行列がサン・ペトローニオ聖堂での戴冠式に向けて行なわれた。この大聖堂はローマのサン・ピエトロ大寺院と寸分違わぬ程飾り立てられていた。そして、教皇と皇帝はともに同じ天幕の下の馬に乗り、まずカルロスのローマ王としての戴冠式のためにサン・ドメニコ教会へ向かった。この教会の建物はローマのサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ教会に似せて装飾を施されたものであった。

実はこの後教皇による皇帝の戴冠式は行われることはなかった。しかし、この世の支配者である皇帝を永遠のものとするために、いや現実的には今後のハプスブルク帝国の政略のために、数多くの祝祭本がプロパガンダとして制作された。（【Appendix Ⅰ-2】図3，図4）

Figure 10. Procession of Charles V in Bologna, Accompanied by Pope Clement VII, for His Imperial Coronation, 5 November 1529 (pl. 31: *Viri-consulares et prelati, timpanistae, tubicines*) *(Miriam and Ira D. Wallach Division of Art, Prints and Photographs, The New York Public Library, Astor, Lenox and Tilden Foundations)*

【図 3】皇帝カール5世のボローニャ市における教皇クレメンス7世を伴った入城式：執政官と高位聖職者たち、ティンパニ奏者たち、ラッパ奏者たち（Romischer Kayserlicher Mayestet Einreytten gen Bononia/auchwie sich Bäpstliche Hayligkait gegen seiner KayserlichenMayestaten gehalten habe. [Augsburg: Heinrich Steiner]; 1529）

皇帝戴冠式以降も、カルロスの入城式は続く。その後には数多の都市を巡る数か月に及ぶ大巡幸には、イタリアでは10、スペインでは 6、フランスでは 4、イングランドでは 2、そしてアフリカでの 2 つの入城式が含まれていた。それは実質的な統治手段としての都市への訪問の結果であると同時に、皇帝の威光を、入城式の催行を課せられた諸都市の財力によって示そうとした王権の仕掛けでもあった。南ドイツ諸都市への巡幸の成果は、1532 年、ルター派プロテスタントのシュマルカルデン同盟諸侯とのニュルンベルクの和約に結実した。1535 年には皇帝軍がオスマン艦隊を撃破しチュニスを奪還すると、10 月以降メッシーナ、ナポリ、ローマ、シエナ、フィレンツェ、ルッカなどのイタリア諸都市を巡幸した（【Appendix Ⅰ-2】）。この巡幸は、皇帝直属軍と傭兵軍からなるいわば軍列を率いてのものであった。最新式の装備と

Figure 11. Hans Schäuffelein, Triumphal Procession of Holy Roman Emperor Charles V: The Imperial Trumpeters and Kettledrummers (Wolfenbüttel, ca. 1525)
(Kupferstichkabinett, Herzog-August-Bibliothek, Wolfenbüttel)

【図４】ハンス・ショイフェライン作、神聖ローマ帝国皇帝カール５世の入城式：皇帝付きトランペット奏者とケトルドラム奏者（ヴォルフェンビュッテル、1525年頃）。（The Miriam and Ira D.Wallach Division of Art, Prints and Photographs, The New York Public Library, Astor,Lenox and Tilden Foundations）

眼にも壮麗な軍装は表裏一体のもので、入城式を平和裏に催行せねば攻城戦が待っているといった硬軟併せた示威行為であった。皇帝たる威厳の表現が盛大であればあるほど、こけおどしの効果は上がる。軍列維持の戦費はかさむが戦争による略奪よりも祝祭のほうが遥かにましといった政治的思惑によってカールの巡幸は進むのである。だがいったん均衡が崩れると「ローマ略奪」の二の舞になりかねない危険性をはらみつつ、イタリア諸都市は祝祭をおこなうことで救われていく。

(b)イタリア・メディチ家の祝祭本 —政略としての婚礼祝祭

1530 年にフィレンツェに復帰したメディチ家は、教皇クレメンス 7 世の庶子アレッサンドロが「フィレンツェ公」となり、皇帝の臣下となったが、小国フィレンツェにとってイタリアを巡る政治状況は困難に満ちていた。1536 年にミラノのスフォルツァ家の跡継ぎをめぐってフランス王フランソワ 1 世はみたび皇帝カールと争った。その翌年フィレンツェ公アレッサンドロが暗殺されてメディチの直系が断絶した後、メディチ傍系であり、勇敢な傭兵隊長として知られた「黒隊長」ジョヴァンニ(1498-1526)の子コシモ 1 世 (1519-1574) がハプスブルク家の支援のもと継承した。コシモは、皇帝の威を借りつつ巧みな政略によって、シエナを併合しつつフィレンツェの中央集権体制を確立し、1569 年には「トスカーナ大公」となった。コシモの政略は権威の誇示と威嚇にあった。そのために専制君主にふさわしく、フィレンツェを豪華な宮殿やモニュメントで飾り立て祝祭を催し、外交に励んだ。ジョルジョ・ヴァザーリ、アニョロ・ブロンズィーノらを宮廷画家など芸術家の庇護や、ウフィツィ美術館やヴァザーリの回廊などを建設など芸術の奨励は政治的背景に結びついているのである。

コシモと皇帝カールの政治的意図が合致した結果が、1538 年の教皇パウルス 3 世(在位 1534 年-1549 年)の仲介による 10 年間の休戦を受けての、皇帝の臨席の下での 1539 年 7 月 5-9 日フィレンツェにおけるトスカーナ公コシモ・ディ・メディチとナポリ副王ドン・ペドロ・デ・トレドの娘エレオノーラ・ド・トレドとの婚礼のための祝祭であった。祝祭本の膨大なリストからも分かるように、ほぼ 1 週間にわたる婚礼祝祭は、花嫁の入城式にはじまり婚礼のミサ、祝宴と催し物へと続く【Appendix Ⅰ-3】【図 5】 ジャンブラーリの言及によると、祝祭のメインイベントは花嫁のフィレンツェへの凱旋入城式、アレゴリカルな「凱旋門」を配した盛大な祝宴、メディチ宮の中庭で上演されたアレッサンドロ・ランディの 5 つのインテルメッツォ付きのコメディア《イル・コモード》の上演であった。いくつかの凱旋門のうちのひとつは花嫁を讃えてプラート門に建てられ、頂部には「豊饒」の擬人像が「安寧」と「永遠」の間に生まれた 5 人の子供とともに置かれた。サン・ロレンツォ教会の参事

Figure 12. Cupid, or *Amor*, Atop a Florentine Pageant-Wagon, Escorted by Mounted Trumpeters
From a *cassone* panel, ca. 1475.
(Institut de France, Musée Jacquemart-André, Paris)

【図 5】コシモ・ディ・メディチとエレオノーラ・デ・トレドのフィレンツェ入城式。山車の頂上の「クピド」もしくは「愛 Amor」が騎乗のトランペット奏者に導かれている。カッソーネ(長櫃・婚礼箪笥)の蓋絵、1475年頃。(Institut de Vrance,Musée Jacquemart-André, Paris)

会員にしてマエストロ・ディ・カッペッラ(聖歌隊長)である作曲家のフランチェスコ・コルテッチャの指揮で八声のマドリガーレ〈イングレデーヴェ Ingredeve〉が「プラート門正面の凱旋門上の24人の歌手に歌われ、4つのトロンボーンと4つのコルネットの合奏によって」演奏され始まった。7月6日、日曜の午後、結婚式典に続き、祝宴が宮殿中庭で催された。フランチェスコ・コルテッチャをはじめコスタンツォ・フェスタ、ジョヴァンニ・マスコーニ、ボッチォ・モスキーニ、マッテオ・ラムポリーニによってこのために8つのマドリガーレが作曲された。アレゴリカルな凱旋門あるいは劇的な活人画であり、アポロンが9人のミューズをコシモの婚礼に招き、そこにはトスカーナの川や都市の擬人像も加わった。彼らはみなレオノーラを讃え、贈物を与え、コルテッチャの指揮で4人の作曲家による7曲の4から5声のマドリガーレがフィレンツェ、アレッツォ、ヴォルテッラ、コルトーナ、テヴェーレ、ピーサ、ピストイアのトスカーナの都市に扮した歌手によって演奏された。([Bowles 1989], pp.23-26)

「続く水曜日[7月]9日、第一の中庭のロッジアの下で豪華な宴会があった。高位高官が各[都市]国家から参集した。…[後に]幸福な花嫁と花婿が第二の中庭に入ってきた。…手に手に松明をかかげ弓と矢を持った数多くのクピドが天井

から吊るされていた。…着座した客人たちがみな舞台を注視すると、徐々に東側から舞台の天空に「夜明け」[の擬人像]が現われた。彼女は赤い花柄のガウンのうえに金色と銀色の織り込まれたケープを羽織り、その翼は白と朱色で、…[マドリガーレ〈Vattene almo riposo, ecco ch'io torno〉を]歌った。彼女の甘美な歌は 2 つのレジスターを持つクラヴィチェンバロ、オルガン、フルート、ハープ、ヴァイオリンと鳥の声[の模倣]で伴奏された。[彼女の背後に]「太陽」が舞台上の天空を徐々に緩やかに昇っていく、これは劇の幕ごとの一日の時間を知らせてくれ、第 5 幕の終わり近くに「太陽」が沈み,ほどなく「夜」が現われた」(Giambullari、[Bowles1989]p.26 による)。

かつての入城式では大聖堂での祝典モテトゥスの演奏が演出の華であり、祝祭の記憶を後世に伝える役割も負っていたが、この時代には、より演劇的で大規模な音楽の演出が祝祭の花形となっていった。インテルメーディオ(インテルメッツォ)である。15 世紀末フェッラーラの宮廷で、古代ローマのプラウトゥスやテレンティウス作のコメディア(劇)上演が始まった。これらを範とし、コメディアが創作されるようになると、その幕と幕の間に音楽を伴う劇が挿入されるようになった。歌と踊りと奏楽を伴い、大掛かりな舞台装置をもって上演されたこのインテルメーディオ(幕間劇)は、ルネサンスの祝祭が生み出した文学と音楽と演劇と美術が織り成す総合芸術の精緻であり、オペラのさきがけとなった。

これらの祝祭劇はメディチの大公たちの婚礼に受け継がれていく。コシモの子フランチェスコとオーストリア王女ヨハンナとの婚礼祝祭は 1565 年 12 月 16 日から 1566 年 2 月 26 日と 2 ヵ月半にも及んだ。上演されたフランチェスコ・ダンブラ作のコメディア《ラ・コンファナリア》はジョヴァンニ・バッティスタ・チーニのインテルメーディオが付き、音楽はアレッサンドロ・ストリッジョ、フランチェスコ・コルテッチアの手になった【Appendix Ⅰ-4】。三代目のトスカーナ大公フェルデイナンド 1 世は、1588 年 4 月 30 日から 5 月 15 日にクリスチーヌ・ド・ロレーヌとの婚礼祝祭を催した。この祝宴ではジロラモ・バルガーリ作のインテルメーディオ《ラ・ペレグリーナ(巡礼女)》が上演され

ている【Appendix Ⅰ-5】。

(c)祝 祭 ヨーロッパ

メディチ家の祝祭は1600年のフランス王アンリ4世とマリア・デ・メディチ(マリー・ド・メディシス)の結婚によってフランスに受け継がれていくといわれる。だがそれに先立つこと70年前、ハプスブルク皇帝家とイタリアをめぐる戦争を繰り広げていたフランス王家に、メディチ家の戦争と平和の祝祭の方策は伝わっていた。

後のフランス王アンリ2世に嫁いだカテリーナ・ディ・メディチ(カトリーヌ・ド・メディシス)(1519-1589)は、コシモ1世とは遠縁であり、幼くして父ウルビーノ公爵ロレンツォ・デ・メディチ(1492-1519)を亡くし、1533年に教皇クレメンス7世とフランス王フランソワ1世の間で次男アンリとの縁談がまとまった。1547年にフランソワ1世が没し夫アンリが即位したが1559年アンリ2世はトーナメントで事故死してしまう。その後フランソワ2世・シャルル9世・アンリ3世の摂政母后として、1559年 カトー・カンブレジ条約によるイタリアへの権利を放棄、カトリックとプロテスタントのユグノー戦争といった困難に直面し、1572年のバーソロミューの虐殺、アンリ4世の即位に至るまでの政治の黒幕となる。アンリ2世の死後、カトリーヌはイタリア風祝祭の導入を行い、イタリア人の画家、建築家、音楽家をの登用し、初期には祝祭本もイタリア語で刊行されている。この間のフランス王家の祝祭は、ルイ14世のヴェルサイユにつながるものでもあり、祝祭による劇的政治の違う展開を見せるのであるが稿を改めたい。

1556年皇帝カール5世が退位する。そのほぼ100年前1453年のオスマン・トルコによるコンスタンチノープルの陥落は、多くの光と闇を東方からもたらせた。軍事革命の要となった統率に働くオスマン軍楽隊の威容は、 実際には催されなかった祝祭行列を描かせた皇帝マクシミリアン1世にとっては理想の軍楽隊として(【図 6】)、王侯には武威の姿として胸に刻まれ、それを現実化したのが皇帝カール5世の入城式と巡幸であった。また、示威機能を祝祭に展開させたメディチ家の婚礼祝祭は、劇場的政治システムと呼ばれるものを確

Figure 7. Ensemble of Trumpeters and Timpanists in the "Procession" of Emperor Maximilian (pl. 113)

【図 6】神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン1世の自伝的凱旋行進「Triumphzug」よりブルゴーニュの軍楽隊、1508-1519 年頃制作（The Miriam and Ira D.Wallach Division of Art,Prints and Photographs, The New York Public Library, Astor,Lenox and Tilden Foundations）

立した。王は王を演じ、権力は眼前に祝祭という形で具現化するのである。これは古代ギリシアやローマの劇的祭祀政治の復興であったが、ルネサンス末期からバロックの表現芸術の発展を促すことにもなった。王権が音楽をはじめ芸術を総動員して祝祭に求めたものは、王はローマそして神につながる皇帝に比され教皇権をはじめとするキリスト教権威もまた芸術も王に仕えることの「今」とそして「永遠の」認知なのである。

祝祭は戦争を回避する知恵であったのか、新たにより大規模な戦争を引き起こす為の打上げ花火であったのか。いずれにしても、ファンファーレは響き軍楽はこだまし、祝典ミサや宮廷での舞踏に音楽は欠かせない演出となり、音楽劇は誕生する。フランス革命による身分制社会崩壊以後もこの風景は何も変らない。戦争がある限り。

Bibliography:

Muratori, Ludovico Antonio, De Spectaculis et Ludi Publicis. Medii Aevi. Dissertatio XXIX, in Antiquitates Italicae Medii Aevii, Milano: Mediolani 1738-1742, 6 vols.; rist.an.a cura e con introduzione di Antonio Viscardi,Modena:Aedes Muratoriana 1962; Bologna 1975: v.II, Milano: Societatis Palatinae, 1739, coll.831-864.

Jacquot, Jean, Les Fêtes de la Renaissance. Etudes réunies et présentées par Jean Jacquot, Paris: CNRS, 1956,1960,1975, 3 voll.

Spettacoli conviviali dall'antichità classica alle corti del'400. Atti del VII Convegno di Studio, Viterbo, 27-30 Maggio 1982. Centro di Studi sul teatro medioevale e Rinascimentale, Amministrazione provinciale di Viterbo, Viterbo 1983.

Strong, Roy, Art and Power. Renaissance Festivals 1450-1650, Suffolk: Boydell,1984 [ロイ・ストロング、星和彦訳『ルネサンスの祝祭 ー王権と芸術』(2巻)東京:平凡社 1987]

Bowles, E.A., La pratique musicale au Moyen Age/ Musical Performance in the late Middle Ages: Musical Iconography, Paris: Editions Minkoff & Lattès, 1983

Bowles, E.A., Musical Ensembles in Festival Books 1500-1800: An Iconographical and Documentary Survey. Michigan: UMI Research Press, 1989.

Ellenius, Allain(ed.), Iconography, Propaganda, and Legitimation. (The Origins of the Modern State in Europe, 13th to 18th Centuries, Theme G), Oxford: Clarendon Press/ New York: Oxford University Press, 1998.

Friedman, John B., & Wegmann, Jessica M., Medieval Iconography: A Research Guide. <Garland Medieval Bibliographies,20: Garland Reference Kibrary of the Humanities, 1870>, New York/London: Garland, 1998.

Bèhar, Pierre & Helen Watanabe-O'Kelly, Spectacvlvm europævm. Theatre and Spectacle in Europe/ Histoire du spectacle en Europe (1580-1750), 〈Wolfenbütteler Arbeiten zur Barockforschung, Bd.31〉, Wiesbaden: Harrassowitz

Verlag, 1999.

Bowles, Edmund A., “Music in court festivals of state:festival books as sources for performance practices," Early Music, XXVIII/3 (2000), pp.421-443.

Watanabe-O'Kelly, Helen & Simon, Anne, Festivals and Ceremonies: A Bibliography of Works relating to Court, Civic and Religious Festivals in Europe, 1500-1800, London/New York: Mansell, 2000. [Watanabe-O'Kelly & Simon]

Tydeman, William (ed.), The Medieval European Stage, 500-1550. 〈Theatre in Europe: a documentary history〉, Cambridge: Cambridge University Press, 2001

J. R. Mulryne, & Elizabeth Goldring (eds.), Court Festivals of the European Renaissance: Art, Politics and Performance (Early Modern History S.), Aldershot: Ashgate, 2002

J. R. Mulryne, Helen Watanabe-O’Kelly & Margaret Shewring (eds), Europa Triumphans: Court and Civic Festivals in Early Modern Europe, 2 vols., Associate General Editors Elizabeth Goldring and Sarah Knight, Aldershot and Burlington VT: Ashgate, 2004

Muir, Edward, Ritual in Early Modern Europe (New Approaches to European History). Cambridge et al.: Cambridge University Press, 2nd ed. 2005

Appendix I 【祝祭本リスト】

[Watanabe-O'Kelly & Simon] = Watanabe-O'Kelly, Helen & Simon, Anne, Festivals and Ceremonies: A Bibliography of Works relating to Court, Civic and Religious Festivals in Europe, 1500-1800, London/New York: Mansell, 2000.

1:王太子カールの入城式

Dupuys, Remy, La triumphante et selemnelle entrée faicte sur le nouuel et ioyeux aduenement de treshault, trespuissant et tresexcellent prince Monsieur Charles prince des Hespaigne Archiduc daustrice duc de bourgongne Comte de Flandres. &c.en sa ville de Bruges lan mil.v.cens. &.xv. le xviiie iour dapuril après Pasques…, Paris: Gilles de Gourmont; 1515; 2º. レミ・デュピュイ『スペイン王子、オーストリア大公、ブルゴーニュ公、フランドル伯にしていとも気高く偉大なるシャルル王太子殿下の新たなる喜ばしき到着のために執り行われたる凱旋と荘厳なる入市式。1515年復活祭前の4月18日ブリュージュ市にて』パリ:ジル・ド・ゴーモン刊、1515年、二折版、33の木版画。

Cf.[Watanabe-O'Kelly & Simon]2700

1519年アーヘンでの戴冠式:[Watanabe-O'Kelly & Simon]1, 2, 3, 4, 5

1526年マドリッドの和約とポルトガル王女イザベラと結婚を祝うセヴィリヤ入城式[Watanabe-O'Kelly & Simon]1571;2321;2322)

2:皇帝カールの戴冠式

Romischer Kayserlicher Mayestet Einreytten gen Bononia/auch wie sich Bäpstliche Hayligkait gegen seiner Kayserlichen Mayestaten gehalten habe. [Augsburg: Heinrich Steiner]; 1529; 4º; 7 pp.『教皇猊下がその皇帝の威厳を掲げての、ローマ皇帝陛下のボローニャ市への騎馬行列(入市式)』[アウグスブルク:ハインリヒ・シュタイナー刊]、1529年、四折版、7ページ、1木版画。

Der Durchleuchtigsten Grosmechitigisten Römischen Kayserlichen Mayestat vast köstlichs ein reyten So geschehen ist zuo Bononia am vierten tag des monats Nouembris Auch wie herzlich gemelte Kay. May. Von Bebstlicher heyligkeit/ seinen Cardinelen vnd officiern daselbst empfangen worden/ mit was volck vnnd getzirden auch die selb K.M. vber meer komen ist. Im M.D.xxjx Jar. Regensburg: Paulus Kohl; 1529; 4º『至尊にして偉大なる皇帝陛下のいとも豪華に騎馬行列されし。ボローニャ市にて11月4日に催されし。着飾った者たちとともに皇帝陛下自らは海を越えて到着され、教皇猊下、枢機卿がた、その諸官らによって到着した皇帝陛下は盛大なる歓待を受けし。1529年』レーゲンスブルク:パウルス・コール刊、1529年、4折版:木版画はカール5世と弟フェルディナント(1503-1564)の戴冠式図。

Hogenberg, Nicolaus, Gratae et laboribus aequae Posteritati. Caesareas Sanctique patris longo ordine turmas Aspice, et artificem ter vernerare manum, Tradere quae potuit rigido mensura virum Pictor Hogenbergus quod per tua saecula cernas Hoc tibi, posteritas vivide, fecit opus. The Hague: Henricus Hondius; n.d.; 2º ニコラウス・ホーゲンベルク『恩恵とまた苦難の後の世の人々。皇帝と教皇の長く整然たる隊列の景観、芸術家の手は三度の春を経て、偉大で高潔なる人物画家ホーゲンベルクの名を硬き金属の版に刻み伝えることができた。これこそ数百年も、後の世も生き続けるべく作られし作品なり』デン・ハーグ:ヘンリクス・ホンディウス刊、刊年不詳、二つ折版。:ニコラウス・ホーゲンベルクによる長さ34フィート幅18インチ1/4の巻紙に40の版画。ヨアネス・セクンドゥスのひとつは〈Divo et invicto Imperatori Carlo V… 神々しくも不屈なる皇帝カルロス5世に〉で始まる2つの詩の付された図版からなる。

Eynreitung Keiserlicher Maiestat auff die Krönung gen Bononia. N.p.; 1529; 4º『ボローニャでの戴冠式のための皇帝陛下の騎馬行列』制作地不詳、1529年、四折版。

Prima e seconda Coronatione di Carlo Quinto sacratissimo Imperatore Re de Romani, Fatta in Bologna. Bologna: Giovanbattista di Phaelli; 1530; 4º『神聖なる皇帝にしてロー

マ王カルロ 5 世の第一と第二の戴冠式、ボローニャにて挙行』ボローニャ:ジョヴァンバッティスタ・デ・ファエッリ刊、1530 年、四折版。

Keyserlichr Maiestat beyde Krönung/ deren die Erste am xxij. Mit eyner Eyszenen/ Die ander am xxiiij. Februarij mit einer gulden kron zu Bononia. Jm M.D.XXX Jar geschehen sein. N.p.; n.d.; 4º『皇帝陛下の二つの戴冠式、最初は22日の鉄の王冠、もうひとつは2月 29日の黄金の帝冠、ボローニャにて、1530年に挙行』制作地制作年不詳。

Giordani, Gaetani (ed.), Della venuta e dimora in Bolonga del sommo pontefice Clemente VII per la coronazione di Carlo V. Imperatore celebrata l'anno MDXXX, cronaca con note documenti ed incisioni…. Bologna: Governativi alla Volpe; 1842; 8º; xxx+184pp+176pp+199pp ジョルダーニ編『1530 年に祝われた皇帝カル 55世の戴冠式のための教皇クレメンテ7世の到着と滞在について。版画と資料つき年代記』ボローニャ、1842 年:12 の挿図。

Hienach volgt Kaiserlich Maiestet Krönung. Geschehen inn Bononia. Auff den vier vnd zwaintzigistenn tag Februarij. An Sanct Mathis tag. N.p.; 1530; 4º; Ajv-[Aiiijr]、『ここに続く皇帝陛下の戴冠式。聖マティアスの祝日 2 月 24 日に、ボローニャにて挙行』制作地不詳、1530 年、4 つ折版 1 木版画。

La Magnifique et solennelle entrée et entrevue de l'empereur Charles V et du pape Clément VII、 Antwerp,1530『皇帝シャルル5世と教皇クレマン7世の偉大にして荘厳なる入市式と会見』。

Romischer Kayserlicher Mayestet Einreytten gen Bononia/ auch wie sich Bäpstliche Hayligkait gegen seiner Kayserlichen Mayestaten gehalten habe. [Augsburg: Heinrich Steiner]; 1529; 4º; 7 pp.『教皇猊下がその皇帝の威厳を掲げての、ローマ皇帝陛下のボローニャ市への騎馬行列(入市式)』[アウグスブルク:ハインリヒ・シュタイナー刊]、1529 年、四折版、7ページ、1 木版画。

Goetghebuer, P.J., Sur l'entrée de l'empereur Charles-Quint à Bologne, en 1529. Réponse a la 64me question proposée par le messager des sciences. Ghent: L. Hbbelynck; 1855; 8°; 11pp フーツゲーバー『皇帝シャルル 5 世のボローニャへの 1529

年の入市式について』1855年。

Agrippa, Henricus Cornelius, De duplici coronatione Caroli V … anno 1530. In.S.Schardius, Historicum opus (1574; 2º; 2 vols.) ヘンリクス・コルネリウス・アグリッパ『1530年のカルロス5世の二重戴冠式について』、S.シャルディウス『歴史』(1574年所収)、アグリッパの『カルロス5世…戴冠の歴史』Caroli Qvinti… Coronationis Historia (Antwerp 1530)の後期の版。カールは異なる二日にわたって、ロンバルディア王の鉄の王冠と神聖ローマ皇帝の黄金の帝冠を戴冠した。

Prima e seconda Coronatione di Carlo Quinto sacratissimo Imperatore Re de Romani, Fatta in Bologna. Bologna: Giovanbattista di Phaelli; 1530; 4º『神聖なる皇帝にしてローマ王カルロ5世の第一と第二の戴冠式、ボローニャにて挙行』ボローニャ:ジョヴァンバッティスタ・デ・ファエッリ刊、1530年、四折版。

Keyserlichr Maiestat beyde Krönung/ deren die Erste am xxij. Mit eyner Eyszenen/ Die ander am xxiiij. Februarij mit einer gulden kron zu Bononia. Jm M.D.XXX Jar geschehen sein. N.p.; n.d.; 4º『皇帝陛下の二つの戴冠式、最初は22日の鉄の王冠、もうひとつは2月29日の黄金の帝冠、ボローニャにて、1530年に挙行』制作地制作年不詳。

Rusconi, Carlo, L'Incoronazione di Carlo V a Bologna … Terza edizione riveduta, corretta ed ampliata dall'Autore. Florence: G.Faziola e comp.; 1866; 16º; 504pp. ルスコーニ『ボローニャでのカルロ5世の戴冠式』著者による増補改訂第3版、フィレンツェ、1866年。

Boncompagni, Ugo; Giordani, Gaetano (ed.), Lettera inedita del Bolognese Ugo Buoncompagni poscia con nome immortale Gregorio XIII Sommo Pontefice Romano nela quale si descrive la incornazione di Carlo V. Imperatore seguita il 24 Febbraio 1530 in Bologna. Bologna: Governativi alla Volpe; 1841; 8º; 24pp. ウーゴ・ブォンコンパーニ、ジョルダーニ編『ボローニャ人ウーゴ・ブォンコンパーニ、後の不朽のローマ教皇グレゴリオ13世の、1530年2月24から続く皇帝カルロ5世の戴冠式の叙述を含む未刊書簡』ボローニャ、1841年。

Ricci, Agostino, Comedia… intittolata I Tre Tiranni, Recitata in Bologna a N.Signore, et a Cesare, Il Giorno de la Commemoratione de la Corona di su Maestà. Venice; 1533; 4° アゴスティーノ・リッチ『三人の暴君と題するコメディア(喜劇)、ボローニャにてシニョーレおよび皇帝の臨席のもと、皇帝陛下の戴冠の記念日に上演』ヴェネツィア、1533年刊、4つ折版、序文、登場人物一覧、要旨含む。

Cf:[Watanabe-O'Kelly & Simon]693-697(入城式);698-700, 702-704(戴冠式);705(祝祭劇)

戴冠式後の巡幸:

南ドイツ[Watanabe-O'Kelly & Simon]6(1530年インスブルック入城式); 7(1530年アウクスブルク入城式); 8(1531年ニュルンベルク入城式)イタリア[Watanabe-O'Kelly & Simon]555-556(1535年10月21日メッシーナ入城式、11月25日ナポリ入城式); 1356-1357(1536:年 シエナ入城式、ローマ入城式、フィレンツェ入城式);1558(1536年シエナ入城式:ここではストルディト(偽アレッサンドロ・ピッコロミーニ)S.Stordito(Alessandro Piccolomini)の劇《コスタンツェの恋 L'amour Costante》が上演されトーナメントが催された; 442(1536年ルッカ入城式:ルッカ共和国の行政官の選出の儀礼「ターシュ(袋)」(投票用紙を集める袋や鞄に由来)開催); 781, 782, 783(標題に木版画), 784, 785(1536年ローマ入城式)。

3:コシモ・ディ・メディチの婚礼祝祭

入城式:

Ma, Ge, La solenne et triomphante entrata Della Illustrissima S.Duchessa di Firenze, dapoi la partite sua di Napoli, in Liuorno, Pisa, Empoli, Poggio & Firenze, con li superbi apparati & Archi Trionphali con tutte le Historie, pitture & motti che in essi erano, con lordine delle suntuose & splendide Noze & Conuiti & alter Allegrezze & feste fatte in la citta di Firenze in la entrata di sua Eccellentia. N.p.; 1539; 4°『令名高きフィレンツェ公爵夫人の荘厳なる凱旋入市式、ナポリの出立からリヴォルノ、ピサ、エンポリ、ポッジオ、フィレンツェに至る。妃殿下の入市式にてフィレンツェで挙行された華麗なる華燭

の宴（アッパラート）と凱旋門、そこに描かれし歴史、絵画、金言格言のすべて、豪奢にして光輝あふれる結婚式、饗宴、歓喜と祝祭』制作地不詳、1539年。

結婚祝祭：

Giambullari, Pier Francesco, Apparato et feste nelle noze dello Illvstrissimo Signor Duca di Firenze, & della Duchessa sua Consorte, con le sue Stanze, Madriali, Comedia, & Intermedij, in quelle recitati. Florence:Benedetto Giunta; 1539; 4°; 171pp. ピエールフランチェスコ・ジャンブッラーリ『令名高きフィレンツェ公爵閣下並びに公妃殿下の結婚式における装飾と祝祭、そこでの奏楽、詩作、マドリガーレ、コメディア、インテルメッツォの上演』フィレンツェ：ジュンタ刊、1539年。音楽をともなうインテルメッツォとコメディ。プロローグは花嫁のフィレンツェへの入市式を描写。ジョヴァンニ・バティスタ・ジェッリ Giovanni Batista Gelli 作の歌曲、コメディ《イル・コモード（快楽） Il Commodo》はアントニオ・ランディ Antonio Landi 作。

Giambullari, Pier Francesco, Personificazione delle città Paesi e Fiumi di Toscana festeggianiti le nozze di Cosimo I° ed Eleonora di Toledo, tratta da uno raro libretto di Pier Francesco Giambullari e ristampata per cura di Ubaldo Angeli. Prato: tip.G.Salvi, 1898; 8°; 30pp. ピエールフランチェスコ・ジャンブッラーリ『コシモ1世とエレオノーラ・ディ・トレドの結婚を祝うトスカーナの都市、国、川の擬人化』1898年。1898年エンリコ・ロスターニョとマリア・カヴァッツァとのローマでの結婚のために再版。

コメディア：

Landi, Antonio, Il Commodo. Comedia. Florence:Beneettp Giunta; 1539; 4°; 104pp. アントニオ・ランディ『コメディア《イル・コーモド》』フィレンツェ：ベネディット・ジュンティ刊、1539年。ピエールフランチェスコ・ジャンブッラーリ『装飾と祝祭』の一部（pp.67-171）として刊行。

Landi, Antonio, Il Commodo. Comedia … Con I suoi Intermedii, Recitata nelle nozze de l'Illustriß. & Eccellentiß. S. il S.Duca di Firenze l'Anno 1539. Nvovamente Ristampata. Florence: I Giunti, 1566; 8°; 95pp. アントニオ・ランディ『イル・コモード。1539年、令名高きフィレンツェ公爵閣下の結婚式におけるインテルメッツォ、歌唱付きのコメディア（喜劇）』改訂新版、フィレンツェ：ジュンティ刊、1566年。

音楽：

Musiche fatte nelle nozze dello illustrissimo Duca du Firenze il Signor Cosimo de'Medici et della illustrissima consorte sua Mad. Leonora da Toletto, Venezia,1539

山口博子「ルネサンスの祝祭音楽－1539年のコジモ・ディ・メディチとエレオノーラ・ダ・トレドの婚礼における音楽について」、『熊本大学教養部紀要　人文・社会科学編』28(1993)、pp.49-61

再現CD:Centre de Musique Ancienne di Ginevra/ Studio di Musica Rinascimentale di Pa;ermo/ Schola "Jacopo da Bologna", Gabriel Garrido(dir.),《Firenze 1539: Musiche fatte nelle nozze dello illustrissimo duca di Firenze il signor Cosimo de Medici et della illustrissima consorte sua mad. Leonora da Tolletto.》(Tactus[TC530001], 1993)

Cf:[Watanabe-O'Kelly & Simon]1164(入城式);1165-1166(婚礼祝祭);1167-1168(祝祭劇)。

コシモの在位中の祝祭本については、以下も参照：

[Watanabe-O'Kelly & Simon]1170(1556年コシモによるフィレンツェのカーニヴァル);1360-1361(1560年併合したシエナへの入城式);790(1560年ローマへの訪問入城式);1193,(1569年ローマでの教皇ピウス5世からのトスカナ大公位授与祝祭への出発);794-796(1570年ローマでの教皇ピウス5世からのトスカナ大公位授与祝祭),[Watanabe-O'Kelly & Simon]1194(1570: ローマでの教皇ピウス5世からのトスカナ大公位授与祝祭からのフィレンツェへの凱旋);1195-1196(1574年コシモの葬儀)

4:トスカナ大公フランチェスコ1世(1541-1587)の祝祭本

1565年12月16日－1566年2月26日　トスカナ公子フランチェスコ・ディ・メディチとオーストリア王女ヨハンナとのフィレンツェにおける婚礼祝祭

入城式と婚礼：

Ricordi storici di feste fatte in Firenze per nozze principeseche o per la venuta di principi [1565-1791]. Florence: tip.editrice dell'associazione; 1868; 4°; 33pp.

『王侯の結婚式あるいは王侯の到着(入市式)のためにフィレンツェで催された祝祭の歴史的記録』フィレンツェ、1868年、フィレンツェでのサヴォワ王子ウンベルトとマルゲリータの結婚式を祝って編纂。

Mellini, Domenico, Descrizione dell'Entrata Della sereniß. Reina Giouanna d'Austria Et dell'Apparato, fatto in

Firenze nella venuta, & per le felicissime nozze di S.Altezza et dell'Illustrissimo, & Eccellntiss. S.Don Francesco de Meici, Prencipe di Fiorenza, & di Siena. Ristampata e riveduta. Florence: I Giunti; 1566; 4°; xiii + 128pp + ix. ドメニコ・メッリーニ『フィレンツェとシエナの君主令名高くも高貴なるフランチェスコ・デ・メディチ閣下との至福の結婚式のためにフィレンツェに到着したオーストリアのジョヴァンナ王女陛下の入市式と華燭の宴』改訂版、フィレンツェ:イ・ジュンティ刊、1566年。

Mellini, Domenico, Descrizione dell'entrata della … Reina d'Austria Et dell'apparato, fatto in Firenze … per le felicissime nozze di S.Altezza et dell'illustrissimo … Francesco de Meici, Prencipe di Fiorenza. Coretta & … stampata la terza volta. Florence; 1566; 8°; ドメニコ・メッリーニ『フィレンツェの君主令名高くも高貴なるフランチェスコ・デ・メディチ閣下とのフィレンツェでの結婚式のためのオーストリアのジョヴァンナ女王陛下の入市式と華燭の宴』改訂第3版、1566年。

Descrizione dell'Apparato della Commedia et Intermedii d'Essa Recitata in Firenze il giorno di S.Stefano l'anno 1565 … nelle Reali Nozze. Dell'Illustriss. & Eccell. S.il S.Don Francesco Medici Pricipe di Fiorenza, & di Siena, E della Regina Giouanna d'Austria sua consorte. Ristampata, con nuova aggiunta. Florence: I Giunti; 1566; 8°; 26pp. 『1565年聖ステファーノの日にフィレンツェで上演されたコメディア、インテルメッツォの華燭の宴の記。フィレンツェとシエナの君主令名高くも高貴なるフランチェスコ・メディチ殿下とその細君オーストリア王女ジョヴァンナとの王家の結婚式において』増訂版、フィレンツェ:イ・ジュンティ刊、1566年。2つの木版画、インテルメッツォ、演劇。

Apparato per le nozze di Francesco I. de' Medici con Giovanna d'Austria [li 28 novembre 1565 – pubblicato per cura di Luigi Verani]. Livorno: Gius. Meucci; 1870; 8°; 15pp. 『フランチェスコ1世・デ・メディチとオーストリアのジョヴァンナとの結婚式の華燭の宴』リヴォルノ、1870年、1870年10月のエットーレ・ウリエットとルイーザ・マイオンキの結婚のための再版。

祝 祭 劇 :

Ambra, Francesco d', La Confanaria, comedia Di Francesco d'Ambra Con Gl'Intermedij di Giouam Batista Cini; Recitata nelle Noze dell'Illstrißimo S.Principe Don Francesco de Medici, & della Serenißima Regina Giuanna d'Austria. Florence: I figliuoli di Lorenzo Torrentino e Carlo Pettinari compagni; 1566; 8° ;126pp. フランチェスコ・ダンブラ『ラ・コンファナリア、フランチェスコ・ダンブラによるコメディア(喜劇)、ジョヴァン・バティスタ・チーニのインテルメッツォ付き。令名高き君主フランチェスコ・デ・メディチ殿下とオーストリア王女ジョヴァンナ妃殿下の結婚式にて上演』フィレンツェ、1566年。フランチェスコ・ダンブラ(Francesco d' Ambra)による喜劇、インテルメッツォのテキストはジョヴァンニ・バッティスタ・チーニ(Giovanni Battista Cini)

Descrizione degl'intermedii rappresentati colla commedia nella nozze dell'Illustrissimo, ed Eccellentissimo Signor Principe di Firenze, e di Siena. Florence; 1566; 8°;20pp. 『令名高きフィレンツェ並びにシエナの君主閣下の結婚式にコメディアとともに上演されたインテルメッツォの記』フィレンツェ、1566年。フランチェスコ・ダンブラ『ラ・コンファナリア』のある版と同じ表題ページの木版画。献辞に「Il Lasca(ウグイ)」(Anton Francesco Grazzini)のサイン。インテルメッツォのテキストはジョヴァンニ・チーニ(Giovanni Cini)、音楽はアレッサンドロ・ストリッジョ(Alessandro Striggio)、フランチェスコ・コルテッチア(Francesco Corteccia)による。

Descrizione degl'intermedii rappresentati colla commedia nella nozze dell'Illustrissimo, ed Eccellentissimo Signor Principe di Firenze, e di Siena. Florence: Filippo Giunti; 1593; 8°;22pp+i. 『令名高きフィレンツェ並びにシエナの君主閣下の結婚式にコメディアとともに上演されたインテルメッツォの記』フィレンツェ:フリッポ・ジュンティ刊、1593年、2つの木版画。

Mellini, Domenico, Le Dieci Mascherate delle Bvfole Mandate In Firenze il giorno di Carnouale L'anno 1565. Con la descrizzione di tutta la pompa delle Maschere, e loro inuenzioni. Florence: I Giunti; 1566; 8°;65pp. ドメニコ・メッリーニ『1565年フィレンツェの謝肉祭に献じた、道化の10のマスケラ(仮面劇)。仮面行列すべてとそこでの創作の記とともに』フィレンツェ:イ・

ジュンティ刊、1566年。標題の年号はフィレンツェ風表記。

Descrizione del canto de Sogni. Mandato dall'Illustrissimo, & Eccellentissimo S.Principe di Firenza, & di Siena. Il secondo giorno di Febbraio. 1565. in Fiorenza. Florence: I Giunti; 1566; 8°;26pp『夢の歌の記。1565年2月2日、フィレンツェにて、令名高きフィレンツェ並びにシエナの君主閣下に献呈』フィレンツェ:イ・ジュンティ刊、1566年。標題の年号はフィレンツェ風表記。

Baldini, Baccio, Discorso sopra la Mascherata della Geneologia degl'Iddei de Gentili. Mandata fuori dall'Illustrissio, & Eccellentiss. S.Duca di Firenze, & Siena Il giorno 21. di Febbraio MDLXV. Florence: I Giunti; 1565; 4°;ii+130pp+ii. バッチオ・バルディーニ『高貴な方々の神々の系譜のマスケラ(仮面劇)についての話。令名高きフィレンツェとシエナの公爵閣下に献呈、1565年2月21日』フィレンツェ:イ・ジュンティ刊、1565年。標題の年号はフィレンツェ風表記

Cf:[Watanabe-O'Kelly & Simon]1158, 1174-77(入城式と婚礼祝祭);1179-1180(祝祭劇);1181-1183(祝賀カーニヴァル)

1567年2月4-20日フィレンツェでのトスカナ大公フランチェスコ・デ・メディチと公妃ヨハンナ・デ・オーストリアの王女エレオノーラ誕生を祝う祝祭

Cf:[Watanabe-O'Kelly & Simon]1185-1186(祝賀カーニヴァル);1187(1568年祝祭劇'I Fabii'の上演)

1579年10月4-14日フィレンツェでのトスカナ大公フランチェスコ・ディ・メディチとビアンカ・カペッロ・ディ・ヴェネツィアとの婚礼祝祭

Ricordi storici di feste fatte in Firenze per nozze principeseche o per la venuta di principi [1565-1791]. Florence: tip.editrice dell'associazione; 1868; 4°; 33pp. 『王侯の結婚式あるいは王侯の到着(入市式)のためにフィレンツェで催された祝祭の歴史的記録』フィレンツェ、1868年、フィレンツェでのサヴォワ王子ウンベルトとマルゲリータの結婚式を祝って編纂。

Gaci, Cosimo, Poetica Descritione d'intorno all'inuentioni della Sbarra Combattuta in Fiorenza nel cortile del Palagio de' Pitti in honore della Sereniss. Signora Bianca Cappello Gran Dvchessa di Toscana. Florence: de' Giunti;

1579; 8°; 35pp. コシモ・ガーチ『トスカナ大公妃ビアンカ・カッペッロ妃殿下を讃えてフィレンツェのピッティ宮の中庭での〈戦いの小門〉の創作品についての詩的記述』フィレンツェ:ジュンティ刊、1579年。狩猟、トーナメント、祝宴、入市式。

Gualterotti, Raffaello, Feste nelle nozze Del Serenissimo Don Francesco Medici Gran Dvca di Toscana; Et della Sereniss. Sua Consorte la Sig.Bianca Cappello … Nouamente Ristampate. Florence: I Giunti; 1579; 4°; 58pp+ii. ラファエッロ・グァルテロッティ『トスカナ大公フランチェスコ・メディチ殿下とその配偶者ビアンカ・カッペッロ嬢の結婚式の祝祭』改訂新版、フィレンツェ:ジュンティ刊、1579年、13の挿図。

Aurifex, Gregorius, De nvptiis magni dvcis Hetrvriae, et Bianchae Cappellae: Carmen. Bologna: Ioannes Rossius; 1580; 4°. グレゴリウス・アウリフェックスのラテン語韻文『エトルリアの大公とビアンカ・カッペッラの結婚について:カルメン(頌歌)』ボローニャ:ヨアネス・ロシウス(ジョヴァンニ・ロッシ)刊、1580年。狩猟、トーナメント、祝宴。

Gualterotti, Raffaello, Vaghezze sopra Pratolino… Florence: I Giunti; 1579; 4°; 15pp. ラファエッロ・グァルテロッティ『プラトリーノ以上の優美』フィレンツェ:イ・ジュンティ刊、1579年。以下が続く:Epitalamio Nelle nozze della Illustrissima Signora Perregrina Cappello, Et dello Illustrissimo Sig. Conte Vlisse Bentiuogli Composto per il Sig.Raffaello

Gualterotti, Alla Serenissima Signora Bianca Cappello, pp.16-24『令名高きペレグリーナ・カッペッロ嬢と令名高きウリッセ・ベンティオーリ伯殿下の結婚の祝婚歌。ビアンカ・カッペッロ妃殿下のためにラファエッロ・グァルテロッティによって作曲』

Cf:[Watanabe-O'Kelly & Simon]1158, 1200-1203